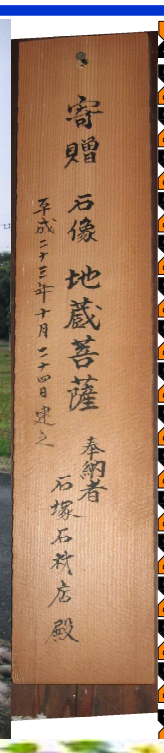
第　８３　号

平成２３年１２月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302



只沢地蔵堂の境内に、立派な石像の地蔵菩薩が石塚石材店様から一式奉納されました。

地蔵様縁日の十月二十四日総代さん始め、正副自治会長さん、用番の皆さん立ち会いのもと開眼法要いたしました。

どうぞ、お墓参りの時などお線香を手向けてください。

仏教が生んだ日本語

童子（どうじ）

童　子

童子と聞くと、物語のなかでなれ親しんだ「大江山の酒呑（しゅてん）童子」、「笛吹き童子」などが思い出される。私たちはお伽話や昔話のなかに登場したり、絵画のモチーフに描かれている童子を、特に宗教的存在と考えないで過ごしていることが多い。

原語をたどると、サンスクリット語の（クマーラ）で音写は鳩摩羅（くまら）。少年とか青年のことで、童真ともいう。しかし少年や青年を意味するだけでなく、出家を希望する剃髪得度前の子どもや若者を指したり、お寺で仏典を習いながら法務をする、おおむね二十歳までの者を童子といった。また、如来を法王として、菩薩をその王子とし、童子ともいう。童子を菩薩として観ることは、執らわれのない無垢なこころをもち、仏になる種である仏性が生まれながらに備わっているからである。

大人たちは、子どもたちの無垢なあるがままの姿のなかにある菩薩に気づかないで過ごしている。異口同音に大人たちは子どもの純真無垢さはすばらしいといいながら、それだけではこの競争社会を生きていけないから、という。弁解とも親心ともとれる曖昧ないい方をしている。子どもたちが「無心な世界」に入り込もうものなら、「勉強してから」と現世に連れ戻すありさまである。大人たちが執らわれている混迷の世界に染まることを成長や発達というのだろうか。また、日本人の　「こころ」と引きかえに生まれた経済大国・日本をそのまま子どもたちへ受け継がせていいのだろうか。大人たちが築いた混迷した社会のなかで「童子」たちは苦しみを味わって生きている。

空海の言葉　シリーズ

財を積まざるを以（もっ）て心とし、
法を慳（おし）まざるを以て性（しょう）とす

●●● 財産を蓄えないよう心がけ、宇宙の道理を人に聞かれたら、けちけちしないで喜んで教える

弘法さんが唐へ留学していたとき、自分に密教の法を教えてくれたお師僧さんである「恵果和尚」が亡くなりました。

弘法さんは、お師僧さまの徳を偲んで碑を建て、「財を積まざるを……」のことばを刻んだのです。

「積善の家に余慶あり」

といって、善いことをした家には、必ず喜びごとが多いものです。

あなたがお金を儲けても、世のため人のためにつかい、自分がもっている技術や知恵を惜しみなく教えれば、きっとあなたの教え子があなたのために碑文を書いてくれるでしょう。